

竹内弘副理事長の体験を聞く(右から)大橋遼さん、饒辺祈さん 5日、広島市の広島国際会議場



「苦しみ 沖縄と一緒」 北谷高の2人 被爆体験学ぶ



【広島市で玉城江梨子】北谷町主催の広島平和学習派遣事業で4日から広島を訪れている北谷高校2年の大橋遼さん(16)、饒辺祈さん(16)は5日、広島被爆者援護会の竹内弘副理事長の体験を聞いた。

竹内副理事長は、原爆投下時は、疎開していたため爆心地から遠くにいたが、数日後、家族を捜すために広島市に入り、放射線を浴びた「入市被爆者」。父親は爆心地から1・7キロで被爆した。父親は再会した時、誰なのか分からないほどにけがややけどを負っていたという。父親が死亡した時の家族の悲しみを話した。

大橋さんと饒辺さんは6日の平和記念式典に参列するほか、広島被爆者援護会主催の「献花・献水慰霊祭」で沖縄からのメッセージを述べる。

「平和とは命を大切にすること」と強調した。自らが被爆者であることを長年、息子に隠してきたことに触れ「被爆者に対する差別や偏見があった」と話した。大橋さんは「被爆証言を聞いたのは初めて。原爆と沖縄の地上戦は違うけど、苦しみは一緒だと思った」と感想を述べ、饒辺さんは「原爆について表面上しか知らなかった。今日聞いたことを身近な人に伝えたい」と誓った。